

# 遠藤周作「おバカさん」における改稿

——〈自分のキリスト〉の表出——

本 田 有 加 子

## 一、はじめに

「おバカさん」は、昭和三十四年「朝日新聞」<sup>(1)</sup>紙上に連載された、遠藤の初めての〈新聞小説〉である。連載開始にあたって、まず「次の夕刊小説」<sup>(2)</sup>という予告記事が掲載された。その中で「遠藤氏は「白い人」で芥川賞を、「海と毒薬」で毎日出版文化賞、新潮社文学賞を受賞した文壇の中堅」であると紹介されている。〈新聞小説〉を担当する作家には、知名度と共に作家としての実績が求められるものであり、昭和三十年、同三十三年のそれぞれの受賞は、そうした要求に応えるもので、まさしく話題性のある新人作家の登用であったといえる<sup>(3)</sup>。だが、連載された作品は、それまでの文芸誌に発表されていた諸作品とは質を異にするもので、先に挙げた「次の夕刊小説」予告文中の、「このめずらしい題名の小説には、とても愉快な人物が登場します」を裏付けるかのような、「山イモのおバケのような馬づら」をし、「知性のひらめきなど一片だにない」「間抜け顔」という容貌をしたガストンの登場となったのである。

遠藤周作「おバカさん」における改稿

「おバカさん」が連載された昭和三十四年当時、読者の好反応があったことは確認できるが<sup>(4)</sup>、同時代評はほとんどなく、カトリック作家である遠藤が初めての「新聞小説」に臨んだのにも関わらず、「カトリック新聞」紙面にも取り上げられてはいない。唯一、同時代評として確認できるのが、中村真一郎、江藤淳、小島信夫らによる、昭和三十四年十一月号「群像」での「創作合評」だが、「おバカさん」は、丁度「文学界」に同時期に連載されていた遠藤の「火山」との関わりの中で触れられている程度にすぎない<sup>(5)</sup>。そうした中、「おバカさん」を見据えた最も早い批評として、昭和三十七年、文庫化された際の江藤淳の「解説」が挙げられる。江藤はその中で、「おバカさん」は、新聞小説の傑作である。単に新聞小説の傑作であるばかりではなく、処女作以来「一番の傑作」<sup>(6)</sup>であると、激賞している。

しかし、「おバカさん」が注目されるようになったのは、『死海のほとり』（昭和四十八年）刊行後においてである。『死海のほとり』に描出された「同伴者イエス」、その原型を「おバカさん」のガストンに見出すという観点から、作品の評価及び検討がなされてきたのである。広石廉二は「遠藤氏はガストンの言動を通して現代のイエス像を描こうとしていたのである」と指摘し、さらに昭和四十八年の『死海のほとり』が出版された地点から振り返って、「おバカさん」のガストンに『死海のほとり』によって決定づけた同伴者としてのイエスのイメージの萌芽を見出さざるを得ない<sup>(7)</sup>と述べている。同様に、笠井秋生氏も『おバカさん』を、『沈黙』を経て『死海のほとり』に至る遠藤の歩みの起点に位置する作品とした上で、ガストンを「遠藤のイエス像（人間の永遠の同伴者イエスの像）の原型」<sup>(8)</sup>であると指摘している。両氏の指摘で明らかのように、「おバカさん」は「同伴者イエス」という『死海のほとり』で描出された、そのモチーフとの関連によって、つまり、その「同伴者イエス」という始原を遡る試みの中で評価付けられてきた作品なのである<sup>(9)</sup>。

この〈同伴者イエス〉という指摘は、作者が作品について語った言葉から導き出されたものと言える。度々引き合いに出される「次の夕刊小説」中の「作者のことば」<sup>(10)</sup>には、初めて〈新聞小説〉へ取り組む作家の意欲と共に、登場人物についての構想が語られている。主人公のことを、「作者はあえて、おバカさん」と呼ぶのだと述べ、そしてその「おバカさん」とは、「ぼくが平生からあこがれているような人物」であり、「母親がいたずら小僧のわが子に「オバカサン」、そうささやく時のあのやさしい愛情」を抱いているのだと、そのモチーフの一端を示している。連載前のこの時点では、「あこがれているような人物」の視点がやや定まらない印象を受けるが、「おバカさん」連載後は、ドストエフスキーの『白痴』に触れて、

そういう大傑作に及ぶはずありませんが、私も自分のキリストを『おバカさん』という同じような題で小説にしたことがある。<sup>(11)</sup>

とあり、あこがれていた人物が〈自分のキリスト〉であったことが作者によって告白される。不特定多数の読者に向かう新聞連載前には語られなかったことである。そして、この〈自分のキリスト〉を描いたという作者の言葉を裏付けるかのように、「おバカさん」は単行本化を機に逐次的に改稿が重ねられていくのである。その「おバカさん」の加筆訂正には、〈新聞小説〉の〈読者〉との共有を持つために取り入れていた要素を、一つの目的性の上から選別、加除するという方向性が認められる。本稿は、単行本『おバカさん』への改稿、つまりガストンを〈自分のキリスト〉へと整えていく過程を、〈新聞小説〉との関わりにおいて捉えようとするものである<sup>(12)</sup>。

まず、作品の背景を構成している時代との同時進行的要素を確認することから考察を始めた。

## 二、〈新聞小説〉であること

「おバカさん」には、連載時の「朝日新聞」紙上に確認できる様々な出来事が、同時進行的要素として作中に盛り込まれているという特徴がある。これは、後の〈新聞小説〉にも共通することなのだが、この作品においては特に前半部に、昭和三十四年時の多数の出来事が登場している。

連載中の同時代的事項が取り入れられた箇所を列挙すると、

・「イヤ……、清宮様、御婚約、おめでとう」（第五回 三月三十日付）

・同僚の飯島は昨日の日曜日に後楽園で見物してきた巨人・西鉄オーブンの模様に口角アワをとばして説明しているのだが、隣りにねころんでいる隆盛は真青な空の一点を見あげたまま、頼りない受け答えをするばかりである。（第十一回 四月五日付）

・「御存知ない……あの方こそ拳闘の米倉さんと今度、試合をおやりになるブラジルのガストン選手その人ですよ」（第二十九回 四月二十三日付）

などがある。それぞれの記事を連載紙の「朝日新聞」で確認してみると、「清宮様、ご婚約」は、三月十九日付（夕刊）の記事に、そして「巨人・西鉄オーブンの戦」は三月三十日付（朝刊）に認められる。また、「拳闘の米倉」の「試合」というのも、実際に五月中旬に行われた「プロ・ボクシング世界フライ級選手権」のことである。さらに、ガストンが「ベトナム号」に乗って日本にやって来たというその場面に描かれる、「有名な映画女優、高峰ヒエ子夫妻が船にのっているのに気がついた。」（第十七回 四月十一日付）という、この箇所も同様に、三月二十八日付（朝刊）の新聞に、「二十七日午後二時すぎ香港から神戸に入港したフランス船ベトナム号（二三六一総トン）で東宝女優高峰

秀子さん（略）夫妻が約七ヶ月ぶりにフランスから帰ってきた」の記事として確認できる。ガストンが「愚連隊」にからまれるという箇所（第三十二回 四月二十六日付）にも、当時、「愚連隊」による事件が多発していたという事象を背景にしていることが窺える<sup>(13)</sup>。このような出来事は他にも散見でき、昭和三十四年時の出来事を題材として用いることによって、作品が同時代の〈現在〉とほぼ同時進行的に進められていることが納得される<sup>(14)</sup>。すなわち、〈読者〉は数日前「朝日新聞」紙上で知った出来事を、「おバカさん」作中で再体験する、という構成を有しているのである。

毎朝、隆盛と会社に出かける朝食の食卓で、はしを動かしながらこの巴絵がサッと目を走らす新聞のページは、三面記事でも映画欄でもない。ましてこの「おバカさん」というような小説でもない。もつとも実用的なる証券欄である。（第三回 三月二十八日付）

巴絵が「目を走らす」のは、「ましてこの「おバカさん」というような小説でもない」という補足の一文によって、「おバカさん」内部の時間軸と連載時の「現在」との一致が強調されている。「映画欄」や「おバカさん」というような小説ではなく「もつとも実用的なる証券欄」に「目を走ら」せているとあるが、それは〈読者〉が今まさに読んでいる「朝日新聞」そのものである。なぜなら、「朝日新聞」紙上の「おバカさん」連載は、六面の「証券欄」と「映画欄」に挟まれた位置を指定席としていたからである。

遠藤の他の〈新聞小説〉においても、同時代的事象は多々確認できる。昭和四十一年「読売新聞」夕刊紙上に連載された「どっこいショ」<sup>(15)</sup>、六月九日付の第一回では、「この夕刊」の「一面には今夜もベトナムの状況がのつていますか。大田さんの都知事出馬の記事は掲載されていますか」<sup>(16)</sup>と、当時関心を集めていた出来事を取り込んでいる。

しかも、〈読者〉に問いかけるといふ、より直接的な形で作品と〈読者〉とを結びつけ、さらに「あなた」が朝、「国電」で乗り合わせた「中年男」が、この〈「新聞小説」〉の「主人公」なのだと、〈読者〉も作中の「主人公」に接点を持った人物として作品に参加させられる。〈読者〉の生活的日常と作中の人物、出来事とが、時間的、空間的な面で繋がりを持たせられているのである。こうした試みは、昭和四十三年に「産経新聞」に連載された「大変だア」<sup>(17)</sup>においても、〈読者〉は作品内に登場する「作家」と同じ目線を共有させられるという形で描かれる<sup>(18)</sup>。

このように、「日常」の「毎日の連続的行為」<sup>(19)</sup>の中で読まれる〈新聞小説〉に、遠藤は〈新聞小説〉を読む〈読者〉の日常生活と交錯する事象を多分に持ち込むことで、作品とその〈読者〉との距離を緊密にさせ現実感を持たせようとしたのだと考えられる。

### 三、〈詩〉の挿入と、その削除

新聞連載時に取り込まれた、読者と作品を繋ぐ同時代的事象はそのまま作品内に残されたものの、作品が単行本化されるにあたって、新聞連載最終回に挿入されていた一編の詩は削除された。そして、この詩とそれに関しての注釈記事は『おバカさん』刊行の度に扱いが変化し、昭和三十八年以降に出版された単行本、文庫本からは詩も注釈記事も全く姿を消すのである。この改稿には〈読者参加〉と言う〈新聞小説〉ならではの演出を削除することによって、〈自分のキリスト〉へと整えていこうとする過程が確認できる。まず、新聞連載時における詩の挿入の効果を確認したうえで、単行本化、文庫本化時の削除について考察したい。

ここで、新聞連載時の「おバカさん」最終回に挿入された詩と、注釈記事の逐次的変化を整理して確認するため、①新聞連載最終回、②単行本、③文庫本、④単行本（改訂版）と分けて整理しておく。

① 新聞連載最終回（昭和三十四年八月十五日）

以下の詩は、作中、隆盛が「手帳に書きつけていた」という一文の後で、隆盛の書いた詩として挿入されている。

・（はるかな国からきた見知らぬ男／まぬけた顔して／いつも野良犬つれている／雨にぬれても　ひとりぼっちでも／信じよう  
あの人たちを／うたを忘れたうた／忘れたつてかまわない　おバカさん／街かどの　いとしいおバカさん）

・（青い空へかえつていった　見知らぬ男／やさしい目をしていつも星を呼んでいる／辛いことだらけ　いやになるけど）

そして最終回の「（終り）」という結びの言葉の直後に、次の注記が紙面に記されている。

・（お断わり＝文中の詩は平林洋子さんが「おバカさん」のために作ってくださった詩からとりました）

② 単行本（昭和三十四年十月十五日刊）

新聞連載最終回から二ヶ月後、同年十月に単行本『おバカさん』が中央公論社から出版された。その段階で、①の作中に挿入されていた詩と注釈記事の「（お断わり）」は削除されている。そして、新しく「あとがき」が加えられ、その後ろの囲み枠の中に「おバカさん」と題した詩が掲載されている。それは次のごとくである（なお、「おバカさん」の詩に付した傍線部は、①の新聞連載最終回に用いられている箇所である）。

・ あとがき

「おバカさん」はわたしの最初の新聞小説である。わたしは前から一種の童話のような小説を書きたいと思っていたので、この機会を利用してその願いをとげさせてもらった。新聞小説はまず自分の読者層を考える必要があるので、わたしは中学生や

遠藤周作「おバカさん」における改稿

高校生をたえず心にかべていたが、連載中、主婦の方や若い会社員や老人の方たちからも激励や感想のお手紙をいただいた。ガストンが皆から愛されているのを知り、わたしは嬉しかった。この「おバカさん」の執筆を奨めてくださった朝日新聞の森田氏や、ガストンの風貌をわたしのイメージ通り描いてくださった三田画伯、および中央公論社の広重さんとこれらの読者と共に、心からお礼を申し上げたいと思う。／なお、この小説のために、「おバカさん」の詩を創ってくださった山口洋子さんに感謝します。／遠藤周作

・おバカさん／山口洋子

遙かな国から来た／見知らぬ男／まぬけた顔して／いつも野良犬つれている／雨にぬれてもひとりぼっちでも／信じようあのひとたちを／うたおう 忘れたうた／笑われたってかまわないおバカさん／街角のいとおバカさん

なににやつて来た／せいたかのつば／かなしい肩をして／いつもどこかを歩いている／石でうたれてもだまされても／信じよう人のこころを／うたおう 忘れたうた／おくれたってかまわないおバカさん／黄昏さびしいおバカさん

青い空へ帰っていった／見知らぬ男／やさしい眼をして／いつも星を呼んでいる／辛いことだらけいやになるけど／信じようあのひとたちを／生きよう 生きようね／どこへいったの哀れなおバカさん／そのひとはいとおバカさん

③ 文庫本（昭和三十七年八月十五日刊）

文庫本版『おバカさん』が角川書店から刊行された。しかし、②で記された「あとがき」も山口洋子氏の「おバカさん」という詩も完全に削除されている。

④ 単行本〔改訂版〕（昭和四十六年四月十五日刊）

この中央公論社から出版された『おバカさん』では、「著者のことば」と題して、帯に②の「あとがき」の傍線部の箇所のみが記されている。詩は③文庫本同様、削除されたままである。



以上が、①新聞連載最終回から④単行本「改訂版」までの加除に関する変化である。

①の新聞連載最終回から②の単行本への変化には、先述の「(お断わり)」削除と、「あとがき」の記載だけではなく、詩そのものの扱いに違いがある。①、②を比較して明らかのように、詩は②の形式によって完全な体を持つものであり、①にはその一部が用いられていたのである。②の単行本「あとがき」で遠藤が謝辞を記している山口洋子氏の詩は、おそらく遠藤の意図で「平林洋子さん」という氏名を持って、一部が新聞連載最終回に挿入されたであろう。そして、「(お断わり)」記事が添えられたのである。

なぜこの詩が用いられ作中に挿入されたのか、という点に関して山根道公氏は、新聞連載であったことなどから、「主人公を読者と共有できたこと、すなわちキリスト作家として読者との伝達性を持ちえたことの喜びから」「読者によってガストンのために創られた詩」<sup>(20)</sup>を作中に取り入れたのだとされている。しかし、この「ガストンのために」詩を創ったとされる「読者」とは、単なる「読者」ではない。「山口洋子」<sup>(21)</sup>とは「第三の新人」と交流の深かった詩人なのである。そして、書簡を通じて得た山口氏のご教示によると、詩は遠藤周作の方からの依頼による作詩であった、とのことである<sup>(22)</sup>。つまり、「読者との伝達性を持ちえたこと」による、「新聞小説」の「読者」からの自発的な創作詩の挿入などではない。詳細な人物紹介もなく、「平林洋子さんが「お、バ、カ、さ、ん」のために作ってくださった」という一文からは、「平林洋子」なる「読者」が、この「新聞小説」の為に投稿したのだという印象を、他の「読者」に抱かせる<sup>(23)</sup>。すなわち、「読者」との交流を持ち得た事を連想させるように、意図的に取り入れられたと考えられるのである。

しかし、このように設定され、用いられていた詩が、単行本化された時には作中から外されるのである。山根氏は続けて、その詩が削除されたことに関して、「長編小説の単行本として刊行される際には全体の構成から言えば付加

的なその詩の引用箇所は全て削られている」<sup>24</sup>と指摘している。確かに詩は「付加的」ではあるが、「長編小説の単行本化」という形態上の要因による削除のみとは言い難い。〈新聞小説〉の〈読者〉との繋がりを演出していた詩の削除とは、むしろその〈読者〉との交流を排除しようという目的性によるものであろう。②の単行本から、③の文庫本及び④単行本（改訂版）への、詩の存在そのものを削除した処置にもそれは確認できる。

また、①の新聞連載最終回に挿入されていた詩を注視してみると、元々の詩と一箇所異なっているところがある。本来は②の詩の全文で確認できるように、原詩では「うたおう 忘れたうた／笑われたってかまわない」であったのが、①では「うたを忘れたうた／忘れたってかまわない」と改変されて挿入されているのである。この「忘れたってかまわない」という表現が、新聞連載時では、「ガストンがいたならば」という隆盛の仮定の言葉、さらに挿入された詩の「青い空へ帰っていった」という箇所と響き合い、ガストンの存在は消え行くものとして受け止められるのである。それは明らかに、遠藤の意図した〈自分のキリスト〉と異なる方向を印象付け、作品世界の新たな指向の上からは不要であった詩が削除されたのだとも言える。このことについては、次章で論及したい。

#### 四、「おバカさん」改稿の必然性

新聞連載最終回の結末を見ると、

（ガスさんは消えたけれど）と隆盛は心の中でつぶやいた。（それでいいんだ。あの男は消えるべき人間なんだから……）

竹取物語の主人公のように空から来て空に戻った——隆盛は空想ではなく真実、ガストンの運命をそう考えるのである。

（略）

（そう——ガストンもいつか、この電信柱のかげにかくれていたのだ）じっとその蝸亭老人を見つめていた。女がどんな悩み

をあの老人に訴えているのかは、わからない。ガストンがいたならばこんな時どんな身ぶりをするだろうと、彼は目をしばたきながら煙草に火をつけた。(第四百四十二回 八月十五日付)

とあり、もし「ガストンがいたならば」という思いから、「目をしばた」させる隆盛の描写で閉じられている。ここでは、「大きなふるい上着」だけを残して消えたガストンが、再び戻ることのない「竹取物語の主人公」になぞらえられ、「あの男は消えるべき人間」だったのだと断定されている。ガストンを語る隆盛の言葉が、ガストン像形成の役割を成していることを考えるならば、ガストンの行方は、作中に改変して挿入されていた詩の「忘れたってかわない」という箇所と補完し合い、一種感傷的な雰囲気の中に受け止められる。つまり、〈新聞小説〉の結末では、フランスからやってきたガストンという一人の〈男〉の死が予感させられて、一つの結末を成しているのである。この〈新聞小説〉での結末が、単行本化された際には新たな指向を持った作品世界に改められているのである。

(そう——ガストンもいつか、この電信柱のかげにかくれていたのだ) じつとその蝸亭老人を見つめながら呟いた。  
(ガストンは生きている。彼はまた青い遠い国から、この人間の悲しみを背負うためにノコノコやってくるだろう)

ガストンの行為を常に受け止め、いわば〈読者〉を誘導する役割を担っていた隆盛の言葉によつて語られるのは「ガストンは生きている」という結末である。感傷のまま作品が閉じられた〈新聞小説〉とは対照的に、ここではガストンは「生きて」いて、再び「やってくる」のだという隆盛の確信の言葉に書き換えられているのである。前章で確認したガストンの死を連想させるような詩の削除はそのために必要であったのであろう。「目的らしい目的」も語らず、謎のような男であったガストンの行為が、「人間の悲しみを背おうため」であったと語られ、ガストンの〈再来〉が付与されるそこにおいて、遠藤の〈自分のキリスト〉を描いたという設定も浮かび上がってくるのである。こ

ここに至って初めて、〈同伴者イエス〉の原型という指摘に辿りつくと言える<sup>(25)</sup>。

また作品の冒頭、ガストンからの手紙が隆盛の家に届いたのは「三月下旬の日曜日」とあるが、笠井秋生氏は、このことに関して二点指摘している<sup>(26)</sup>。まず第一は、「三月下旬の日曜日」が「この年の復活祭」「三月二十九日（日）」に符合している点である。これは連載後ガストンを「自分のキリスト」に則して作品を整合したこととして確認できる。なぜなら、連載時においてこの手紙が舞い込むのは「三月下旬」ではなく、「三月中旬」と描写されていたからである。次いで、笠井氏は同書の中で日曜日の郵便配達について「速達でもないかぎり当時、日曜日に郵便が配達されることは実際にはありえない」と述べているが、この指摘からすれば、「復活祭」当日に「ありえない」はずの郵便物配達が設定されているということになる。しかし、「おバカさん」連載当時は、日曜日でも郵便物（普通・速達・外国郵便）が配達されており<sup>(27)</sup>、遠藤が自然な形で「復活祭」に一致させて、ガストン来日の通信を指定したと言える。

これまでみてきたように、〈自分のキリスト〉表出が可能となったのは単行本化によってである。連載時には、〈読者〉に対する意識から、幅広く誰もが親しみを抱く男を登場させ、同時代的現象や〈読者〉との交流を連想させるような詩を挿入し、〈新聞小説〉「おバカさん」を完結させた、と言える。作中、「聖書」や「神学校」といった語は出てくるものの、それまでの作品に比べて宗教的要素は希薄である。不特定多数の〈読者〉と向き合い、最大公約を獲得しなければならぬ〈新聞小説〉にあつては、特定のテーマを持ち込むことが難しかったためだと考えられる。ここで注視しておきたいのは、連載時、世上には「スチュワーデス殺人事件」<sup>(28)</sup>と呼ばれる、神父と教会が関わっていたと推測された事件が起きていたことである。これを機にカトリックに対する誹謗、中傷が強まり<sup>(29)</sup>、そのため当初から念頭にあった〈自分のキリスト〉<sup>(30)</sup>が直接的に描きにくい状況にあったという推測も成り立つ。この事項に関し

ては、別稿にて論じる機会を持ちたい。

かくのごとく、単行本『おバカさん』によって初めて、自ら意図した〈自分のキリスト〉をガストンに表出させることが可能となったのであり、言わば、この新たな作品世界への指向のために、〈新聞小説〉「おバカさん」は改稿を避けることができなかったのである。

註(1) 遠藤周作「おバカさん」(「朝日新聞」夕刊 昭和三十四年三月二十六日、同年八月十五日 全百四十二回)

(2) 「次の夕刊小説」(「朝日新聞」昭和三十四年三月二十三日付)

(3) 門馬義久は「作家の女房役として」(「解釈と鑑賞」12月号臨時増刊号 現代新聞小説事典 至文堂 昭和五十二年十二月)の中で、「新聞小説の場合はいわゆるネームバリューを無視することはできない」と言い、「一、三年前の作家や作品の評価に基いて候補者を選定し」「新人の登場を主張する」こともあると述べている。また、山村亀二郎は昭和三十五年頃のこととして、「朝刊小説はベテランの作家」が書き、「一、三年先まで約束されていた」が、「夕刊小説の舞台だけは新進作家が登用」(「文芸春秋」平成四年十月号)されていたと述べている。

(4) 遠藤周作「あとがき」(「おバカさん」中央公論社 昭和三十四年十月)

(5) 「創作合評」では江藤淳が、遠藤の他の作品に比べて「最近の新聞小説の「おバカさん」を肯定的に評価している箇所が見られるものの、他の中村真一郎、小島信夫にあつては、「火山」「海の毒薬」に言及しているのみである。

(6) 江藤淳「解説」(「おバカさん」角川書店 昭和三十七年八月十五日)

(7) 広石廉二「おバカさん」——ガストンの生き方(「遠藤周作文庫別巻 解説 遠藤周作のすべて」所収 講談社 昭和五十一年十二月)

(8) 笠井秋生「おバカさん」論——遠藤周作のイエス像——(「作品論 遠藤周作」所収 双文社 平成十二年一月二十日)

(9) 井上洋治氏も〈同伴者イエス〉という観点から、ガストン像を捉えている。「悲愛を生きる」ことが「同伴者として生きることである」と述べ、その「思想は、既に「沈黙」以前の、「おばかさん」のガストン・ポナパルト(略)の姿勢にも窺うことができる」と指摘している。(「季刊創造」第三号 聖文舎 昭和五十二年四月一日)

遠藤周作「おバカさん」における改稿

- (10) 遠藤周作「作者のことば」(「次の夕刊小説」所収「朝日新聞」昭和三十四年三月二十三日付)
- (11) 遠藤周作「愛の男女不平等について」(「婦人公論」昭和三十三年三月号)
- (12) 本稿の主旨からは外れるので詳しくは触れないが、単行本化された時ガストンはより日本語の出来ない人物へと、その戯画化が強められている。一例を挙げると、「はい」と返答していたのが「ふぁーい」という特徴ある返事に改められている点である。
- (13) 「朝日新聞」昭和三十四年四月二十八日付
- (14) 例えば、三月二十九日付(第四回)の連載では、「道」というイタリア映画があった。「ザンバノという男に、ぶたれてもけられても、いじめられてもみつがされても、そんな男のあとをとばとばとついていくジェルソミーナとよぶ女。そして最後には冬のわびしい夕日の照る山のなかで男から捨てられて……」と、その映画の内容が語られるが、昭和三十二年五月二十五日に日本で封切られた「道」(監督フエデリコ・フェリーニ、出演ジュリエッタ・マシーナ、アンソニー・クイン)は、その年の「キネマ旬報ベストテン」(「20世紀シネマ館」講談社 平成十六年三月十八日)で一位を獲得した話題作(昭和三十一年、第二十四回アカデミー賞外国語映画賞受賞)であった。また、ガストンの容貌を「喜劇俳優フェルナンデル」(第二十回 四月十四日付)に例えているが、これも、「朝日新聞」昭和三十年五月十六日付の紙面に、フェルナンデル主演の「ドン・カミロ頑張る」の映画評が写真付で掲載されており、昭和三十四年を前後してフェルナンデル出演の映画は多数上映されていた(「ヨーロッパ映画作品全集」キネマ旬報社 昭和四十七年十二月)事実を踏まえている。同様に、作中でガストンに向けられる「白痴」という言葉にも、ドストエフスキーの『白痴』を基にしたソビエト映画「白痴」が話題を博していたことが関連しており(「朝日新聞」昭和三十四年一月二十六日付、二月十一日付(夕刊)、三月二十六日付)、同時代的要素を題材に取り込もうとした遠藤の意図が読み取れる。
- (15) 遠藤周作「どっこいシヨ」(「読売新聞」夕刊 昭和四十一年六月九日、同四十二年五月十五日 全二百八十九回)
- (16) 連載紙の「読売新聞」で確認すると、「ベトナム情勢」関連の記事は六月一日付(夕刊)に、「大田さんの都知事出馬」とは、当時総評議長を務めていた太田薫のことで、「読売新聞」六月一日付、六月四日付のそれぞれ一面に確認できる。いずれも当時の関心を集めていた出来事で、連日のように「読売新聞」紙上に記事が掲載されている。
- (17) 遠藤周作「大変だア」(「産経新聞」昭和四十三年十一月一日、同四十四年四月二十六日 全百四十六回)

(18) 「大変だア」は、最終回に至って「遠藤」なる作家が「S新聞の小説の第一回目」を書き始めんとするところで終わるのだが、その書き出しが「産経新聞」に連載された、実際の「大変だア」の「第一回目」なのである。つまり、その「作家」が書く「小説」はすでに読者が読んできた「大変だア」そのものであることに気づかされ、ここで読者は、これから始められようとする作中の「小説」を「遠藤」なる作家と共有することになる。

(19) 川島秀一氏は、『おバカさん』——自分のキリストをめぐる——（『遠藤周作——その文学世界』国研出版 平成九年十二月）の中で、「おバカさん」が新聞小説であったことに触れて、「新聞小説」という形式にあつて、へ読む」という行為は「日常から隔離された超然とした時間と位置が確保されているのではない」「その小説を読むことは毎日の連続的行為なのだ。この時、「読者」は「小説」が語られていく過程そのものにより強く参加することを要請される」と述べている。

(20) 山根道公「解題」（『遠藤周作文学全集5』新潮社 平成十一年九月十日）

(21) 山口洋子、詩人、作詞家。代表作は「誰もいない海」（唄 トワ・エ・モワ）。『遠藤周作文学全集15』（平成十二年七月十日）の年譜で確認できるように、遠藤は昭和二十九年文化学院で講師をしている。この時、山口洋子氏は学生として在籍しており、遠藤の講義を受講して面識があったとのことである。

(22) 本田宛書簡（平成十五年十一月二十日付）において、山口洋子氏は次のように記している。「あれは私のオリジナルの作品で、遠藤周作さんから依頼されて書いたものです」。

(23) 「平林洋子」の姓について山口氏に確認したところ、昭和三十四年当時すでに作詩をしていたが、「平林」姓では一度も詩を発表したことはない、とのご教示を得た。おそらく、遠藤の恣意によるものか誤記であろうと思われる。それゆえ、単行本刊行時に、正しく「山口洋子」の姓名で紹介されたのであろう。

(24) 山根道公「解題」（前掲）

(25) 笠井秋生氏は、「新聞連載中、遠藤のひそかに抱くこのイエス像がガストンに託して表現されていることを見抜いた読者は、決して多くはなかったであろう」（『おバカさん』論——遠藤周作のイエス像——）（前掲）と指摘している。

(26) 笠井秋生「おバカさん」論——遠藤周作のイエス像——」（前掲）

(27) 一般普通郵便の日・祝日の配達が休止となったのは、昭和四十三年五月十七日付「郵々集第47号」で、「日曜日における

遠藤周作「おバカさん」における改稿

配達業務の休止」が通達されてからのことである。

(28) 昭和三十四年三月十日、BOAC勤務のスチュワーデスが殺害され（「朝日新聞」昭和三十四年三月十一日付）、ドン・ボスコ修道院のベルギー人神父に容疑がかかったが、捜査途中でその神父が帰国した事件である。

(29) 粕谷源蔵「平気で犯されるプライバシーの権利」（「カトリック新聞」昭和三十四年六月二十八日付）、岡田純一「話題と反応」（「カトリック新聞」昭和三十四年七月十二日付）等がある。

(30) 「座談会 ほくらの小説談義」（「週刊読書人」昭和三十四年五月四日）において、出席者の安岡章太郎に対し、遠藤は連載中の「おバカさん」に触れて、「おバカさん」が何を書きたいかは、安岡にわかっているはずだ」と語っている。

※単行本の引用は、『おバカさん』（中央公論社 昭和三十四年十月）による。

※引用に付した傍線、二重傍線は全て引用者による。

（ほんだ ゆかこ・関西学院大学大学院文学研究科博士課程後期課程）